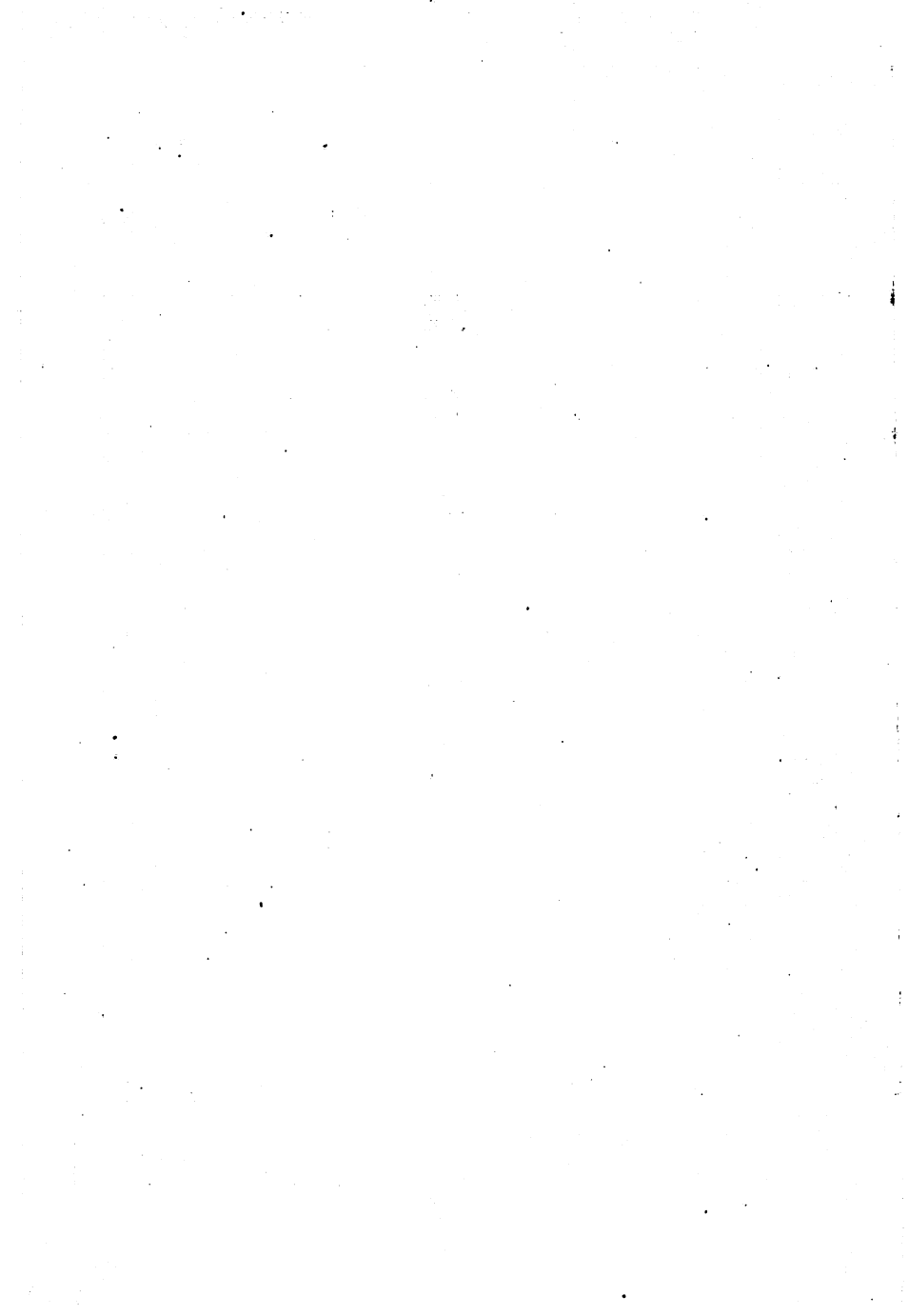


鎌倉三代記



作者紀海音

序廣德神異錄に曰く。天地は凶惡を長育せず。蛇鼠は龍虎と成る事能はず。天網恢々たり去つて何處に行かんとす。天性大樹の御氣性。花實備はる鎌倉山。動きなき世に扇が谷。千代萬代の龜が谷。春知りがほの梅が谷。ヨロシ時めく源氏ぞ芳はしき。増時維建仁三年源の頼家卿。故右大將家の譲りを受け征夷將軍に拜任有り。虎の威有つて猛からぬ廿二歳の若みどり。丁固が松と見ゆれども。李白が酒杜牧が色。二ツの品に身を浸し。政道怠り給ふ故。秩父北條土肥小山舊老智化の忠臣等。度々に諫の術盡きてフシ勤番出仕も遠ざかれれば。辨依邪曲の若者共。晝夜お側に蹲踞する中にも比企の判官が。齋娘の前君御寵愛淺からず。一幡君とて當年は四歳の若君ましませば。舅心に邪を。裁けと御ぜんよしかずとて。貪慾驕奢のあら入道同苗三郎員家。笠原太郎兼澄中野の五郎廣教。胸に惡事を徒黨の武士。枕をわつて謀計の。色には出でず判官は謹んで申す様。調奴も此頃出羽の國羽黒山の山伏。願行院豪海とて當國に徘徊し。假令ば手足叶はざる年來の病人を一祈に働かせ。啞に忽ち物言はせ盲人に眼を開かせ。難病癰病加持力にて本復させずと云ふ事なし。世學つて此驗者を活不動と尊稱す。さるに依つて。某も密に私宅に招き寄せ。殿若君の御身の上御祈禱を頼みしに。丹精を擲てて御壽算二百餘歳迄は。髓に加持し延せしと。卷數を持參し今朝より。御廣間へ相詰めさせ置き候。御目見得を遂げさせ度く願ひ入候と詞を盡し言上す。地頼家御機嫌麗しく其驗者儀は某も。先達て聞いてあり急いで招喚致すべし。それ此方へと御説にて。奏者に連れだち願行院。悠々と立出でて御目に。遙に畏る。詞頼家御覽じ。ム、願行院豪海とは貴僧の事な。世は濁亂に及べども三密瑜伽の功積り。病苦を救ひ

且は又。鎮護國家の至願の旨。甚だ以て神妙なり。地今日よりしては頼家が祈の師ぞと宣ひて。フシ渴仰あるこそ笑止なれ。地豪海詔ふ氣色もなく。左右を見廻し打嘆き。詞往昔役の優婆塞孔雀明王の咒を受持し。鬼神を役し人民の壽命を延し。法流を汲知る者は今の世に恐らく拙僧只一人。此度修法の加持力にて御壽算二百餘歲迄。隨に請合申せしと眞言放つて言ひ散す。地間注所に控へたる朝比奈の三郎するく走り寄り。豪海が膝元にどつかと坐り。詞コレ御師。某元來武骨者。佛法の有難い仙術の不思議なも。曾て以て存ぜねども。大かた人の壽命には方量の有るべし物。大食大酒滯事を隨分謹み嗜んでも。百年は活にくい。よし又和僧の咒咀て。我が君二百餘歲迄御長生なさるゝとも。誰あつて其時迄御奉公を仕り。虚か實の證據には何者が出て立つべいぞ。どうやら護摩の灰臭い。地判官殿も方々も。獨鈷仲間のぐるらしいと。フシ頭叩いて嘲笑ふ。地かねく膝合せたる中野の五郎つゝと出て。詞いしくも言はれし朝比奈殿。八幡拙者と同腹中正法に不思議はない。外法成就の人ならば其段は知らぬ事。命を延るも縮めるも畢竟以つては同じ事。某を一加持に祈殺して見せられよ。經文の端くれも些と覚えて居る男。地現證なくては信用せず如何にくと詰掛る。豪海些とも悪びれず。詞ヲ面白く。邪正一如の宗意なれば善惡には拘らじ。望みに任せ其方の命を落してたつた今。嘲笑をふさがんと印事々しく結びかけ。地神咒を唱へ眼を閉ぢ暫く觀念する内に。不思議や五郎忽ちに面色變り慄ひ出し。あら耐へがたや苦しやな。大聖不動明王の索に五體を締付けられ。手足も竦み動ずと。眼を見つめ戰慄し。フシ不思議と云も餘あり。地各是はと仰天し天晴御坊の御法力。方便の御殺生もう此上は御赦免あれ。縛をも解せ給れと。スエテ聲々にこそ詫びにける。地豪海は打顔き。夫こそ出家の本懐たり。苦痛を救ひ申さんと重ねて印を結びかけ。珠數さらくと抑揉は五郎御座に起直り。先非を悔む涙の體苦々ハツト感じ合ひ。フシ頭を垂れて居たりける。詞朝比奈かつらくと笑ひ。此義秀がむき出した黒い眼を抜かうとは。むまたらしい方々。賣僧坊主が行力にてちくとんばかり朝比奈が。腕先にて縛つて見よ。地然ないと汝大騙一寸もたゝ

せじと。太刀捻くつて押直る。地勢ひに氣を呑れ。豪海左右返答なく。五人の者もうちくとフシ片隅欲しき氣色なり。地斯とは誰か知せけん。和田の義盛監來り。御前に畏り。詞君をば始め諸座々御尊敬ある客僧へ。悴に候朝比奈め持柄の我儘差起り。慮外の振舞致す由千萬恐れ入候。地義盛日頃の忠勤に思召かへられて。御赦免あらせ給はれと頭を付けて言上ある。詞判官大きに悦んで。ヲ、御尤く。子を持つてこそ世の中の親の心は量るれ。地法印へは某が幾重にも詫申さん。御子息の我儘も時に取つては武士一疋。羨しいく。詞底意を残さぬ證據には若狭の前が妹に。淺茅と申す乙娘貴殿の嫁に進ぜたい。地朝比奈殿を判官に取る儀は成るまいか。フシどうぢやくと抱入る。地是も巧の一ツぞと義盛合點行きながら。然あらぬ體に會釋して。詞出頭無二の能員殿殊更以て我が君の。御縁家に繋る事身に取つての大慶と。地世に嬉しげに領承ある。朝比奈ずつと立上り。詞ヤア付上るな入道め。今日此頃に漸と取出武士の分際で。聲などとはぞんざいな口引裂んと飛懸るを。地義盛中に押隔たり是非辨へぬ若者かな。汝を聲に取んとは。心に一物有つての事。契約申す義盛も心に一物有つての事。平にくと囁けば朝比奈早く合點して。詞成程聲に成りませう。是判官殿隨分と。仕拵にお氣張られい。嫁入長持塗箆簞笥箱貝桶狗張子。部屋の世界も其方から。味噌鹽薪米油。其外天上無生ぢやと笑ひて。屋敷に三重歸りけり。地頻伽は卯の内よりも。其聲諸鳥に優るとかや。生先しるき初元結。千幡君と聞えしは。頼家卿の御舍弟にて今年十二の干支の馬。手綱かいくり静々と春の野懸の乗姿。おとなしやかに美しくぼつとりしてしほらしく。實にも武將の敏とは。フシ名乗てしるき御器量や。地山の内の松蔭に暫し御馬を控へられ。谷七郷の繁榮を悠々と眺望ある。茶道坊主の勘齋を近く參れと召寄せて。詞汝は當地の者なれば。此所を以前より鎌倉と名付たる。謂れは定めし知るらんな。イエく所には住み候へども名所とも舊跡とも。白河夜舟又してもうまい所を引おこされ。髭作つたり燻べたり困つたる若旦那。語つて聞かせたが給へ。されば入鹿の大臣とて。猛惡無道の逆臣あり。又大織冠鎌足とて智仁勇を備へたる。忠臣是を悲みて

天神地祇に祈誓をなす。忠貞神にや通じけん。天より一ツの鎌降りしを。これ吉左右と押戴き欺り寄つて入鹿が首。水も堪らず揺落し。それより天下太平の守りの爲と其鎌を。此相州に納し故鎌倉山と名付たり。なんと目出度い所でないか。ハ、くくく殿様にはいつの間に左様の事を御存じ有る。然らば拙者も覺えたる谷々の名は多けれど。寢もせて君を松葉が谷。耳と口とにさゞめが谷託は盡ぬいづみが谷。憎いかイ、ヤ可愛がやつ。のぼせばいこう舐るが谷すしなやつとて誂るがやつ。折角茶の湯教へても。銀くれるやつ呉れぬやつ。吝いがやつか酷いがやつ。あらまし斯様に候と。呆言盡せば若君は。地氣さくな奴とのお口合。オクリ馬上靜に歩ませ行く。地東御門の向ふより。比企の三郎貞家。御所よりの歸るさに此所へ來掛りしが。出頭自慢の鼻の先千幡君のお先とも。知ず顔なる咳拂い邊を拂ひて打つて来る。御近習の若侍つかくくと立寄つて。詞ヤア比企殿にて候か。若君のお供先下馬なされいと立塞がる。三郎驚く氣色なく。當時某下馬せん者武將ならで恐らくは。地鎌倉中に覺なし。家來の者共片寄るな。フシ通れくと云放つ。地お先徒士の衆聲々に。ヤア緩急なる詞かな。詞大樹の御舍弟千幡君眼が見えぬか酔狂か。但しは引ずり下さうか返答聞んと罵れば。員家けらくと笑ひ。眼潰ればお主らよ。我君の小舅辨へ知ば其方より。きつと下馬をば致す筈。若輩人に見許すと傍若無人に云散し。地一鞭あててはいしめと。フシ中突刺て駈通る。地コハ慮外者遁さじと。一度にはらりと抜つて。追駈んとする所を若君は聲を上。詞ヤレ早まるな。彼等が無禮は頼家の御心よりする事ぞ。大老役を相勤る。和田秩父さへ了簡して。見遁しにする狼藉者。若年の身が云募り。彼に迷惑致させては頼家公の御心に。嬉しとは思すまじ。親兄の禮重ければ堪忍するぞ方々よ。必ず粗相致すなと道の道たる御一言。御幼稚ながら頼朝の器量の胤を受け給ふ。聰明叡智の生れ付色には出ず心には。千里の馬も伯樂に逢ねば跛同然と。世を恨みたる御背近習の武士も口々に。扱も憎い比企が谷。いざ追着てきりがやつ。ぼつこしもないやつくを。越えて屋形に三重入り給ふ。善惡を身に與らず忠言の。鋤鋤止し畠山重忠の屋敷には。賓客車馬の道絶て雨を疑ふ松

の風。糸に亂るゝ淺みどり五柳先生窓に倚り。七松居士が床に臥す。氣色を見せて文机に。文武の眼まくばりてフシ悠然としておはします。地本田の二郎近常。宿直に詰めて居たりしが差寄つて小聲になり。詞今日御所の様子をば未だお耳に達せずや。巨細は確と知らねども。候人原と朝比奈殿。口論を仕出され鬨靜に及びしを。親父義盛駈付られ。事穩便に納まる上。判官が乙娘義秀に妻すとの。契約迄ありし由。一門廣き和田殿が。悪人徒黨に成れては。易大事にて候はん。何とぞ御思案廻らされ。此縁組を妨けて然るべうやと伺へば。重忠鬨爾と打笑ひ。ハテ吉左右かな。比企と縁組致せしは義盛天晴發明者。敵の手段を此方の手段にするが軍書の秘事。地お頼もしき和田殿と咄の跡もとありあへず。又差向ふ物の本。フシ氣もしんゝと澄渡る。フシ夜も闌に。地裏門を。忍びやかに音づくる。近常頼ておつとり太刀駈寄つて差覗けば。頼家卿の御母君千幡君と只二人。扉の外に立ち給ひ。詞重忠に對面し。密に尋ぬる事の有り。案内せよと宣へば。地ハツトばかりに立歸り。斯と告ぐれば重忠も。驚き遠て迎に出て。御兩所を勞り。オクリ上座に誘ひ奉り。地其身は適に押退り。詞重忠お召あるべきを夜陰の御歩行さりと。氣遣しく候と謹んでおはします。地母君暫し御涙御衣を絞らせ給ひつゝ。さればとよ世の中に。自程な憂事の。數々多き者はなし。頼朝卿に別れし時。共に黄泉に赴くか。さらずはいかなる山の奥谷の蔭にも世を厭ひ。後世願はんと思ひしに二人の若に身を繋れ。心にもなく世に立つて歎きを重ね日を重ね。漸として頼家に家を譲りて嬉しやと。思ふ甲斐なく此頃は。酒と色とに打亂れ。親の諫を聞ぬからましして。臣下の強意見。憎み疎めば方々も出仕を止め給ふに付け。詞小人共が世に誇り。人を人とも思はずして。今日此若が供先を。乗打せしとは何事ぞや。地いかに文盲野人として刀も腰に帶む身が。主従の禮知ぬとはよもや世間へ云れまじ。頼朝生てましまさば斯様な不義は致すまじ。後家の子ぞとて侮るのか。武將の弟たる者を匹夫の馬の蹴上をかけ。衣袋を汚せし無念さを。思ひ量りて給はれと。フシさめく泣いておはします。詞重忠横手をちやうど打ち。古今稀なる狼藉者。狐は虎の威を借るとは。斯様の事を申べき。糺

明致すは易けれど。露顯に及ばず頼家公。政道暗き識あり何れを何れと別き難き。地御連枝の中なれば。知らず顔こそ御自愛と宥め申せば母君は。成程其方の云ふ通り此事のみは白が。心一つに濟みもせん。只恨めしきは頼家が。邪曲者に氣を奪はれ其行末は身を亡し。國をも遂に失ふは。鏡にかけて見る如し。切て此子を亡人の形見と思ひ障妨なく。成人さして詠めたし。其方なでは後見に。頼まん武士はなきぞとよ。日頃の忠義改めず。勞り仕へ給はれとお手合すれば重忠。詞コハ勿體ない御有様。頼家公のお若氣は老臣どもが入代り。千度も萬度も諫を入れ。夫にも承引なされずは。地お家の爲に換へられず。無體に押込參らせて。此若君を守育て。管仲晏子が義を守り。鎌倉三代將軍と。侍き申さば四海の内廳かぬ草木は候まじ。人數ならぬ奴原は。鰻魚の水を慕ふとも。遂には自滅致すべし。お心安かれ母君様。今宵お成の壽に。指古し候へども。畠山が重代を。地若君に獻上と。太刀をお前に差置ば母君顔面打解けて。ヲ、頼もし。さり乍ら李陵が如き忠臣も。夷の方へ降參し章邯が勇持つたるも。秦を背きし例あり。二心なき神文に。血判あれと宣へば。重忠少しえせ笑ひ。詞神文誓紙と申す事武内の大臣の。湯起請より事起り。鐵火を握り或は又牛王に血をばあえしなど。上古の風儀に候へども。末世は人間邪曲なゆゑ。神も非禮を受け給はず誓紙の名有つて誠なし。地義經を偽る土佐坊が。七枚起請の先例など。お家に於て不吉なり。夫迄もなく御心を。安め申さんそれと詞の下に近常奥の襖を引明くれば。朱の鳥居のありくと。八幡宮の額をかけ。鐙を列べ玉垣の光輝く有様は。オクリ嚴しくぞ見えにけれ。地重忠やがて懷中より。一紙の願文取出し。高らるにこそ讀上たり

忠心しるしそろへ

再拜。愚臣重忠敬つて申て申さく。それ神道人道正直の。一つを以て建立す。就中正八幡宮は源氏累代擁護の

尊靈。神に誓ひて面々が約束堅き金鐵の。鎧一領旗指物。寶前に納め奉る。地掇若君の御手を取り。一々次第に教へ給ふ。まんづ東の第一は御代萬歳の春秋を。重ね櫻や八重櫻。フシ小櫻威花やかに。躬向の袖の白妙に。フシ曇らぬ光り久方の。月に星の指物は千葉之介胤直。忠義の弓の一張に彌猛。心の幾度か。敵を欺くやり梅や。鳥毛にまがふ鶯の。花に留りし印はそも。坂東の八平氏。時めく武士の名取川。フシ名乗て通る時鳥。卯の花飾る腹巻に。夏の雪かと過たる。團扇の紋は兒玉鶯。風にそよ。吹貫の栢走りに散り浮ぶ。紅葉流の龍田川。緋威は岩永鶯。五番に見えしは春日野や。紫裾濃の割小札。甲の星の晃きて。眞向肩庇。忍の緒。釣鐘の指物は。信濃の七鶯ごさんめり。萌黄匂ひのものがみがた障子の板の揚卷に。ハヅミフシ四目結を附けたるは。近江源氏の佐々木とは。誰も知るらん白糸を。小オクリ染ぬ心に色と香を。錦革の胸目鏡。鬼の腕を鋭くも。一きは目立つ指物こそ。淺利の興市と御覽せよ。扱八番に飾りしは。紺糸威の胴丸に。總獲輪の筋甲。大旗小旗吹流し。お花流しの染こみは。武藏の國の住人。仁田の四郎忠綱。次に列ぶはいつとても向ふ敵を宇都の宮。好む所の摺纏目。龍虎の指物。フシ嚴しき。フシ末座なれども隠れなき。黒革威に金紋の二ツ頭のまふたるは。駿河の國の住人天智天皇の末孫。竹の下の孫八左衛門。扱其外大和源氏美濃侍。近江の國には山本柏木木村姉川。播磨の國には富田高梨赤松鶯。伊賀に服部伊勢平氏。三河に足助矢知武者。出雲に道田河井山。伯耆に詫麻姉輪の一鶯。總じて日本國中の侍所武者所。嫡流庶流陪臣迄末世末代子々孫々。永く源氏の幕下に屬し不忠の心を挾まば。ナホスフシ神罰疑ひ有るべからず。地今日よりしては重忠が若君補佐の臣となり。眼に魏徵が鏡を張り。肱に諫の鼓をかけ。胸に誹謗の木を抱き。美惡邪正を手の内に。四海太平國繁昌コハリ連や。濱の眞砂は盡くるとも。源氏の御代は盡きせじと。三通謠ひ奏つれば。母君若君諸共に。悦び勇み立給ふ。源の太公ぎじんけつ。慈あり敬あり忠ありとも申す。ばかりはなかりけり

第 二

地手車ててぐるまの フシ品しなこそ變かはれ。源は清和なかつの流れなみ堰せききとゞむ。戀こひの湊みなとに頼家公よりあき。色と酒との亂みだれ髪かみ。さばけ過ぎたる近習きんしゆが、そゝり上たる太鼓口たこぐち。拍子ひょうしに乗のて手車てぐるまの女房達にようだちはざはく。と。殿御一人どのごひとりを宿の花枝やどはなえだを離はなれぬ風情ふうぜいにて。太股たひざつめる痣しずぬく。フシ姿すがた頼たのれてしどけなき。地若狭ぢわさの局奥きよくよりも。悠々ゆうゆうと立出たちて。詞ナフ申ことばなし我君様われきみさま。どう思召おもほすお心ぞ。正體しやうたいもなき御風情ごふうぜい。地母君様ちもきみさまや北條殿きたじょう。御耳ごみみへ入らば嘸まやさぞ。御嘆ごなげかしう覺おぼさんと。實體じつたいつくる風俗ふうぞくの。フシ様ふしさまはづれさへ優やさしけれ。地頼家ぢよりあきほとんど無興むきやう有り。詞總ことづじて女と云いふ者は。子を産うむと早はやや氣が滅め入いる。此界このかいの樂たのしみは色と酒とに極きまつた。地なんぼう富士ふじが名山めいさんでも。抱だいて寢ねたらば冷ひやたかる。更科さらしなの月つきちやとて。左ひだりのみ變かはつた事もなし。兎角うしかう浮世うきよは柔やわかな。膝ひざと談合だんごと引寄ひきよせて。フシ足擦あしこらせておはします。詞若狭わさの前まへは聲こゑを上げ。コレ申まをし父様ちやうさま兄上にいじやうも聞きこし召めせ。女の目にさへ餘あまりたる取所とりどころなきお遊びあそびに。踊おどり狂くるうて座まます。こな様方さまがたの御心底ごんしん。地何なんとも私わしは吞く込めぬ。一幡君いちぱんきみは御幼少ごせうしやう。近頃きんぐう大事だいじの御命ごめいぢやなぜ御意見ごいけんを成なれぬと。心一杯こころいっぱい理りをせめて。フシ恥はぢしめる。こそ道理ことわりなれ。詞判官ことわん眼めに角かくを立て。入いらざる和女わにの諫言かんげんだて。格氣りきの様ようで見苦みくるい。大將たいしやうの御榮耀ごえいようが珍めづらしい事ことでもなし。女護にようごの島しまへ渡わたらうと。仰おほられても是非ぜひないに。屋形やがたの内うちのお慰なぐさみ。重疊ちゆうたふの義ぎと思おもうて居ゐる。御意見ごいけんは此方このうへの役和女やくわにの役やくは氣きに入る役やく。やくたいもない事こと云いはずとも。一幡君いちぱんきみのおむづかる。奥おくへくくと睨ねられて。残のこる詞ことばをいへばえに。言いねば胸むねに乳ちちも張はりて。オクリ悄々せうせうへとして入いり給たまふ。フシ斯しかる所ところへ。地秩父ちしちふの六郎重保ろくぢやうぢゆう。披露ひろも遂ついず入い来きれば。頼家卿よりあきも近習きんしゆも。俄にがにつくる武士行儀ぶしぎやうぎ。フシ咳せき拂はらひこそ笑わらしけれ。詞ア、大事だいじないく。些ちとも御騒ごさわぎあそばすな。重忠ぢゆうしゆこそは年に恥はち片意ぺんい地ぢばかり申まをせども。此重安しぢやうあんめは我君われきみの日々夜々ひひややの色遊いろあそび。地御羨ごせんしう存ぞんずる故ゆゑ。拟たとこそ推參すいさん致いたせしが。武將ぶしやうとも有あらうずる。御器量ごきりやうにはざりとは。御慰ごなぐさみが小ちひいと氣きを持もつれば頼家卿よりあき。詞ム、なんといふ重保ぢゆうぢゆう。手ての變かは

つたる挨拶は是も意見の色品よな。それとも遊び小さいと難じて見たる心は如何に。さん候我君の遊樂あそばす名は高く。見れば女中四五人など相手に取つてのお樂み。大磯狂ひ仕る小大名より下の事。和田酒盛の昔など手ばなした儀が面白い。某々存するに。女中の五百も三百も。地お泉中へ追放し。龍宮城の樂みは。フシ如何あらんと云ひければ。地頼家近習口々に。八幡飲る物好かな。サア女中用意あれ乙姫は美人の由。差詰に若狭の前。それ／＼つかめと立騒ぐ。詞重保は小聲になり。イヤ／＼子持はうつるまい。その妹の浅茅こそ比企殿の乙姫。乙姫の名も御器量も。似合しからんと勸むるを。地頼家暫し御思案あり成程浅茅が器量の儀は。聞及んだりさりながら。詞氣の毒は夜前はや朝比奈と云ふ男を持つ。あの盤面の意地張者。斯様の事を聞いたらば。地鎌倉中を一夜さに。でんぐり返そと云はうもの。残念さよと宣へば。詞ア、お氣弱い事ばかり。往昔鳥羽の法皇は源の仲宗が。妻女的美質を聞し召し。仙洞に召入れられ。御寵愛あそばされ。祇園女御と是を稱ぶ。其後仲宗法皇を恨むるの色の見えければ。官職を削られて隠岐の國へ左遷ある。地斯様の例も候へば。一寸一筆御墨付。某に賜はらば朝比奈に對面し。浅茅を迎へ參らんとフシ手に取る様に言ひ放す。判官豫て和田秩父同士討さする階附。仕済したりと下笑し。詞ヲ、頼もしい／＼。娘じ慢てなけれども小憎體なる朝比奈には。些と過たと思つて居る。地頼むと云ふに頼家も硯引寄せさら／＼と。一筆書て賜はれば。重保やがて懷中し。お氣遣遊ばすな彼奴を云ひ伏せたつた今。御輿を入れて此御所を目前の龍宮界。珊瑚の枕瑪瑙の帶琥珀の盃眞珠の鍋。人魚の吸物鰯のぬた。鯨の一小ん焼孔雀の摺身鳳凰の。玉子のふは／＼ふはと乗る。人心こそ三重愚なれ。地吉日を三浦の家の御祝言。九十三騎の一門は云ふに及ばず小大名。出入の町人御用人。御部屋見舞の菓子杉折。蒔繪の文箱紅の紐解きそむる花嫁御。浅茅の前と聞えしは。二八に二ツ三ツばかり。數へ足したる器量よし。聲の鶯百千鳥。聞いて詠めて口吟む。フシ歌の趣向ぞ懷しき。地斯る所へ朝比奈は。不興顔して立歸り。詞エ、嫁入程世にくくな面倒な物はない。外へ出れば髭頬が細つたなどと夢聊か。地知らぬ難題云ひかけ

られあつた胸惡さに立歸れば。女郎奴等がちらばうて。油臭くて頭痛がする。傍八軒寄るまいと筆を振れば女房達。フシ逃て奥にぞ走り入る。地淺茅の前は立寄りて。さりとて初心な其様に。當言は言ぬもの。嫁入つた晩からお側へも。寄らぬといふはあんまりと。無念な事と抱つけば。詞ア、舌たるい許してくれ。地拜むく逃廻るを。詞イヤイヤ人の來ぬうちにお前に些と無心がある。サア其無心が嫌ひ物。今日は大事の精進日。地フシ嫌ぢやくと聲立つ。詞スリヤ頼む事聞かぬ氣か。エ、あたくといと振放し。地駈入らんとする所を。淺茅は頓て懷中より。護脇差取出し既に自害と見えければ。朝比奈やがて抱き留め。詞サア品に由て聞てくりよ。地短氣なる女がある如何にも無心聞くである。ひらにくと押留む淺茅悦び手を仕へ。詞無心と申すは別ならず。恥しながら。自を。判官殿の娘とは偽りにて候と。云はせも果てず朝比奈。ナニ能員が子でないと云ふ仔細は。ア、御不審は御尤。誠は都六條の傾城にて候が。畠山の重保様。京詰の折節に。假の枕の重なりて仇に思はぬ中なりしを。地御奉公とて是非もなう。つい此國へ御下り有り。程なう迎ひのお乗物。身請も首尾能く相濟んで。いそ／＼爰に下りしに思ひの外な判官殿。詞奥の一間に呼入れて。向後身共が娘分。風俗詞も更めて。諸事公道に嗜むべし。和田が秩父が兩家の内婿に取るとの仰ゆゑ。地重保様に逢ふ事もと。存生有りし効もなく。此お館へ嫁入は死ぬべき我が時節なり。お情あらば朝比奈様。我が戀人に逢せて給へ。フシ頼みまずと泣居たり。詞朝比奈覺えず手を拍つて。扱巧んだら／＼。コリヤ氣遣すな禍も三年置けば役に立つ。身共が女房嫌ひなが和女が爲には大仕合。地願ひの通りさつぱりと。埒を明けて其上に。重保と嫁人も。此朝比奈と云ひも果てぬに奏者番。詞御上使として畠山六郎殿の御出と。地隣々に呼はれば淺茅はハツト立上り。サア彼の人が見えました。早う逢せてくると。うろ／＼するを押留め。某所存有る間。先づ暫くと奥へやり。オクリ式臺にへこそ出にけれ。地重保上座に押直り。威儀纏ひて云ふ様は。詞貴殿の内室淺茅姫。容儀優れし其聞え。上聞に達しつゝ。御殿へ召れ御酒宴の御相手にと有る御説にて。某迎ひに参りたり。きつと御請け申されよと。詞録く相

述る。地朝比奈ふつと吹出し。色狂ひする程あつて。嘘劫の經た狸殿。尾を出せ／＼手を出して。下されませいと降参せい。喰ぬぞ／＼六郎と。フシ頭を叩いて打笑ふ。調重保少し色を變へ。某一生假初にも虚言云うたる覺がない。疑はしくば御墨附頂戴あれと差出す。地義秀ハツト立寄つて参返し繰返し。寸々に引裂て大太刀半分抜あげ。大腔揚げて。調コリヤ六郎。此お便を承りうつかと爰に來りしは。三浦一家を侮るのか。但しは比企の判官に。眼を剝れたが怖かつたか。所存を聞んとつゝかくる。重保騒ぐ氣色なく。非道の使者に某が望んで來るは仔細あり。當時大名多けれども和田と秋父の兩家こそ。文武の人と指されたる。其義盛が何故に。無道卑劣の判官が聲に貴殿を致されしは。重保更に吞込まぬ。善惡探り知らん爲。態々推参致したり。忠臣變る事なくば妻女を君へ上られよ。但し惡人一味の氣か有無の返答眞直に承はらんと云ひければ。朝比奈顔色和げて。成程／＼得心した。擬なう女房と云ふ者は一夜でとんと持ちおもり。放かし所を其處此處と。思案して居た眞只中。地諛意殆ど満足せり。淺茅／＼と呼びたける。聲に従ひ走り出て。なう六郎様懷しやと。スエテ縋り付いてぞ泣きにけり。地重保ハツト赤面の。色も聲骨も抑靜め。調比企殿のお娘御淺茅の前とは此方よな。如何様世間の沙汰程有り天晴御器量御容體。地我が君の御望みも。道理道理と立退くを淺茅は猶も取纏り。調未練に候御卑怯な。恨が有らば打明けてなぜ聞えぬと宣はぬ。地判官殿に欺られ。憂い月日を送りしも。お前にどうぞ逢はうかと。思ふ心の樂みに。今まで生きてはありしぞや。誰が怖うてうぢうちと。見知らぬ顔を仕給ふと。千々の思ひを一口に。フシ云うて歎くぞ道理なり。地重保ほうど持てあつかひ。返答もなくきよろ／＼と。フシ溜息吐いて居たりけり。地義秀立寄り襟元をほと／＼と打破き。調ぬつくりとした顔付でおつかない事して置いたな。根本根元聞いて居る。些少には候へ共女房一足進上する。地三百目とはねだるまい。先づ抱付囁付と。フシもどかしがるも可笑けれ。地重保莞爾と打笑ひ。調遠來と仰られ美事の女房賜はりて。千萬大悦仕る。私宅において打おかず。賞翫致し申さんと。地手を引合うて立歸るを朝比奈向ふに立塞がり。調先づ待て一

言問ふ事あり。シテ其方は眞實に女房に持か自然又。君へ上うて連行くのか。ム、あたらしい詞かな。始に貴殿の内室を。迎ひに來たる某が。今では自分の妻女とて何と違變が成る物ぞ。只今御所へ連行くと聞くより中に押隔り。弓矢八幡そりや成らない。此朝比奈が媒人は。大鏝を數百本。打付たより堅い事。日本國が動しても。びくとも動く事はない。臆病至極の腸が。臍の下へ落着いたら。何時にても迎ひに來い。地失までは身が預ると腕押捲れば。重保も氣色を損じ聲荒らげ。詞ヤア無禮過た朝比奈。汝が媒人を頼みにて。六郎妻を持つべきか。假にも比企が娘とは。名を聞くさへも穢はしい。さつぱりと縁切つたぞ。ヲ、去らば去れ此上は朝比奈が女房にする。詞イヤ御説意ぢや連れて行く。ナンヂヤ實正請取るか。スレヤ何分にも渡さぬか。地ヤルマイ渡せヤルマイと。互に詞詰あうて。フシ鏝元寛げ立寄れば。地淺茅は左右に取付いて。詮ない事にお命を。果し給ふか情なや。詞自ら跡を暗して館に見えぬと有るならば。お二人様は我が君へ。申譯こそ立つべけれ。時節を待つて判官と親子の縁を切つたなら。地心變ず六郎様。女夫に成つて給はれと。フシ涙ながらに立出れば。地兩人ハツト感じつゝ。出來したり神妙なり。今出て行くは知らぬ分。夫婦の縁は切つた分。此館をば駈落分。朝比奈殿の分も立つ。貴殿の分も立つてある。如何にも。さらば。さらば。さらば。さらば。三方へ別れ。行く身ぞ。三重切なけれ。地藝として爲さざる事なき樂みは。富貴の客の癖とかや。斯くて御所には重保が。遅参いかゞと夕暮の。鞠場に騒ぐ女中鳥。こだまの響く大廣間。弓鎗ばかり役目とて。フシ立列びたる氣色なり。地然るに和田の義盛は黒縁の乗物を。玄關深く昇据あさせ。誰そ御取次頼みましよ。頼みませうと云入る。地中野五郎立出でて。詞ヤア珍しの和田殿。何故御出仕あらしぞ。サレバ上意の旨を受け。朝比奈が最愛召連れて参つたり。宜しく御披露頼みます。ヲ、御太儀。追付けて御對面あるべしと。地奥へ入らんとする所へ畠山の重忠。是も蒔繪の乗物をお次の間まで昇入れさせ。詞コレ中野殿。お取次頼みますと聲かくる。ハア是は。重忠殿。貴殿も御出仕有りしよな。さればとよ悴重保め。上意を受けて朝比奈の。妻女を伴ふ途中より。

俄に邪氣に當てられて身心惱み候故。遅參を憚り某誘引致し候段。御披露頼むと云ひければ。地中野合點はゆかねども咎めだてしてねぢ者等に。したゝかなめに逢はうかと。成程承知致したと。フシ御前を指て走り行く。地義盛顔をさし寄せて。詞ナウ重忠。朝比奈が女房は此乗物の内に居る。御自分同道致されし其乗物は何者ぞ。重忠莞爾と打笑ひ。其方にも朝比奈の内室伴ひ給ふとは。慥に見届け罷在る。此方も亦朝比奈の妻女をば連れ参つた。如何様武士の魂は割符を合す様な物。合へば仕合違うたら。その時互に改めう。ハ、ハ、ハ、ハ、秩父成程尤ぢや。追付け割符が知れうもの。然らばお尋ね申すまい。ハテ扱後程く。と。地互に尻目遣ひ合ひ。フシ物をも言はず控へたり。地斯くと聞くより頼家卿。やがて廣間に御出あり。義盛此方へくと仰に従ひ乗物を。手ぐりぐりに昇出れば。地大將浮れ出給ひつ。籠の鳥とは恨しい。姿をちよつと水鳥を飛せくと御意を受け。義盛やがて乗物より黒革織の鎧を出し御前に指置て。謹んで畏る。君を初め近習共こそはそも如何にと呆れつ。フシきよろくとして居たりけり。地義盛顔を振上げて。詞ハア心得ぬ方々かな。朝比奈が最愛を御所望と有る御墨附。重保上意を述べられし。惣じて武士の最愛は。弓鎗小太刀薙刀など。色しな數多候へども。粹に候朝比奈は度々の先駆矢軍に。地裏をもかへさぬ鎧とて。親より子より兄弟より。別て最愛致す故。中々惜み申せども。諛意をいかで背かんと。地無體に持參致せしが。若し粗相はし候かと。フシさあらぬ體にあひしらふ。詞頼家くはつと赤面あり。汝等今日來る事素直の所存に有るまじと先達て推量せり。重忠が膚外をも序に聞て遊ばんと。地宜ふ内に乗物を。同じく手ぐりに昇入れて。白銀の猫取出し御膝元に差置て。其身は遙に押退り。詞是は先年頼朝卿西行法師に下されし。銀猫にて候を。修行の旅の妨げとて。門前の章に投やりて通りしを。地縁を求めて某が家の秘藏に仕る。承れば我が君は朝比奈が妻女をば無體の纏慕あそばす由。詞彼の女儀も出生は京堀川の遊女の由。實や世上の諺に。猫には遊女が成るとやら承はつて候へば。何れを寵愛なさるゝもさして變らぬ儀と存じ。蹴上致し候と眞顔つくつて言上ある。比企の員家つゝと出。扱々かた

がつた骨折つて。巧み出された事ながら。外の目からは出来過る。言はば武將の御身にて是しきの御慰み。有るまい儀とも申されず。其上朝比奈女房は。親判官が乙娘の若狭の局の妹を遊女なんぞと言ひ落し。猫の或は鎧のとて我が君を嘲るは。兩人共に叛逆と睨んだ眼は違ふまい。返答聞かんと罵れば。重忠カラ／＼と笑ひ。ナニ我々が逆心とは。古へ秦の趙高が鹿をば馬と争ひて。世を傾けし故事なんど聞きはつゝの咎めよな。地それは悪人此方は忠義の鐵護人の。地鼠を取らする猫なるぞ。随分用心あられいと。フシ空嘯いて在します。地頼家甚だ立腹あり。詞ヤア推参なり汝等。諫は臣の道なれと若年者と侮つて。嘲哂するこそ奇怪なり。地二度對面叶はぬぞ其所立去れと宣へば。兩人聲を打揃へ。地ナウ御勘氣とは曲もなや。主君は二代我々父子。元暦治承の昔より。建仁正治の當代迄身は泰山に倚懸り。命は鷲毛に等くして。奉公怠る事なければ。地追放たるゝ覺えなし。詞諫の詞は苦けれども。身を助くるの良藥にて詔ふ辯は甘けれども。地命を滅す毒草と。夢聊かも御存じなく。忠臣は遠ざけられ。佞媚の族が勧めにより。すみていの柳腰金谷園裡の花の顔。酒宴妓樂にお目眩み心を奪はれ給ふ事。お笑止や情なや。三仁去つて股空しく。詞范増死して楚は亡びし兩人蟄居致しなば。土屋北條土井岡崎新田佐々木千葉上總。地其外名有る諸大名頼みなき世を憤ほり。皆分國に引籠り讒臣奸人時を得て。禍必ず蕭牆より忽ち起つて萬代の。源氏のお家の恥辱となり。君萬歳のお命も。亡し給はん淺ましやと。秩父はお袖に取付けば。和田は疊を打敲き。フシ諫言實に道理なり。地頼家左右の返答なく。ひかふる袖を振放ち。殿中深く入り給ふ。地二人は溜息ほつとつぎ。實に良禽は木を擇ぶ。賢臣は師を擇ぶ。愚將と知らて今日迄。仕へし事の後悔さよ。地廣言憎しと聞き給ひ。重ねて討手給らば。潔よく腹切つて。臣下の手本にせんものと。フシ悄々立つて歸らるゝ。地近習の者共聲々に。詞ヤア後れたる人々かな。君を恨みて腹切るに。所選みは無い筈ぞ。地所望／＼と取捲いて。スハ事こそと見る所に。地重保朝比奈龍象の。浪を蹴立る如くにて。一文字に駈來り。大太刀振つて立懸れば。詞にも似ず我一と。フシ逃げて御殿に走り入る。詞義秀猶も

怒りをなし。しや物々し愚人めら。帝釋天の威を藉つて。喜見城に籠るとも。地朝比奈手くせの門破り捻り殺して捨つべしと。兩人御殿へ駈入るを。和田も秩父も取付いて。詞ヤレ逸まるな若者ども。三度諫めて容れられねば身を退くは君子の道。地首陽の族に世を凌ぎ滑瀆に釣を樂まば鎌倉ばかりに日は照るまい。御殿へ向うて慮外すな。ヤレ待て／＼と引留むる。秩父は伯夷が仁を説き。和田は四皓が義を守る。重保朝比奈兩人は。かうせい豫子が刺客の。猛きを寫す虎の髭。獅子の吠ゆるが如くにて往つ戻りも飛返り。踊り狂ひし有様は。須彌勃海を跨りし。龍伯公の勢も。是にはいかで勝らんと。見る人聞く人今の世に。語りて。共に興じける

第 三

地唐土に優りし物は何々ぞ。京羽二重と大名の。お道具持の造り髭。揃うて／＼徒士の衆。手を振る腰振る鳥毛振る。鶴が岡への御参詣。先驅後乗きらめきて。光りを三の大鳥居。だんかづらの松かげに。御乗物を昇据れば。乳人お婢女立かゝり。高麗の餡仙家の蜜。龍眼肉ともてかしづく。御果報日本一幡君。實生を出すはき木や。若狭の局當年はお厄年とぞ白重。薄紅梅の袖匂ふ。柳が枝に初櫻。フシ咲かせて見たる景色なり。地後乗滑川四五右衛門。二重の腰も奉公の。七重に折りて若君の御前に蹲づき。御殿御意屈成されたか。もう追付けて御座るぞや。八幡様へも厄神へも。手々を合せてのゝ様とおつしやると早今の間に。お背かによんによと仲まする。取わけて今日は。放下もあり能もあり。蜘蛛舞綾織八挺鉦。鳥追萬歳大黒舞見せましたならてつきりと。館へ往のとはおつしやるまい。地久しい事ぢやかゝ様のお腰がな痛みましよ。爺父めが膝へ乗せませう。お出なされと愛すれば。詞イヤ／＼此處が面白い。いつもの様な切合しよ。地爺父も人形を持つて出い。早やう／＼と大將の。フシわやくは心廣かりし。詞サア切合も仕ませうが。あれ／＼あそこを見さつしやれ。西から南へ押渡つて。漫々たる大海も。をつくるめて若殿のお泉

水も同じ事。鯛も有り海老も有り。鰹節の生たのが。びち／＼とはねます。連立て往て見せましよと紛らかせどもイヤ／＼。鯛おれは切合／＼と。地お膝元なる辨慶人形。鉞持つてはげ頭。こつりと鳴れば。アイタシコ。鯛八幡堪忍ならないと。地心得て持つ懷中人形巴女が大長刀。鯛エイヤツトウトウエイヤツトウ。地如何はしけん若君の人形碎け落ちければ。鯛か、様大事の辨慶を爺父めが此様に仕をつたと。地むづかり給へば母君や女房達は入代り。藤せどきかぬ／＼とて。泣入り／＼仕給ふに。うろ／＼涙に四五右衛門。鯛若君堪へて下さりませ。今年ちやうど四十年。御奉公仕れどか様に不覺仕らぬ。地正八幡も照覽あれ。巧んでは致さぬと。幼人人に誓言も。フシ實體過ぎてをかしけれ。

鳥追大黒舞

鳥追フシやんら目出たややんら樂しや。千町や萬町の鳥追が参つた。福の神を祝ひこめしらげもよねやろ。ましらげもよねやろ。よねやろがちやうには福と徳と参つて。宿かろと申す。宿借り候はば殿も榮え候。我が身も榮え侍ふ。三下り大黒舞フシ大黒舞を見さいな。福大黒見さいな。大黒／＼。大黒と申すは。大唐の人ならず。天竺の人ならず。住吉の角の方に炭屋を仕て居られた。夫で色が黒いは。本調子鳥追やんら樂しやんら目出たや。三下りオン大黒舞を見さいな。福大黒を見さいな。木調子誰人の誰やろ。左大臣に右大臣。關白殿のお手かけぢや。三下り大黒と申すは／＼。角前髪の昔より夜這好なお人で。あちらの隅でもちよ／＼。こちらの隅でもちよ／＼。隅々でちよこるとて。炭消にけつまづいて夫でお色が黒いは。鯛コレ大黒舞。とつとと彼方へ退いてたも。鳥追敵の邪魔になる。ホ、／＼なめたりなめたり。女の中から鳥追とはいか成る君が鳥追ぞ。色の黒いがお好なら大黒舞も相伴せう。ハ、／＼有様がわしや傾城ぢやが。様子が有つて此通り今日鳥追の水上がりや。ハアいはれを聞けば面白や。身共とても浪人者。妹の傾城に

何卒巡り逢ん爲。大黒の今ぶきぢや。あんまり退いた中でもない。なんと一所に行くまいか。成程くさうしましよ。さあ大黒舞やらつしやれ。先づこなたから諸はつしやれ。やんら目出たや。やんら樂しや。調四五右衛門聲をかけ。コレヤく鳥追大黒舞。よい所へ参つた故利子の御機嫌直されて。皺腹一ツ助かった。とても事に今一節お慰め申してくれ。コレハく有難い。お詞を聞きます。お望みと有るからは。傾城の身の上を。鳥追にして諦ひまじよ。鳥追やんら目出たややんら樂しや。千兩や萬兩の身詣客が参つた。比企の家に祝ひ米姉御もよねやろ。妹御もよねやろ。よねやろがぢやうには慾と惡と巧んで嫁らそと申す。よめらし候はば比企も榮え候。我が身も榮え候。嫁らす處とは誰人の誰やろ。和田殿に秩父殿。大將軍のお手かけぢや。御代の盛りととは若殿のナホスフ御祝。地歌や心に懸りけん若狭の局顔さし出し。よくく見れば都にて同じ流れを勤めたる。妹女郎の八千代なり。何故斯る身の上と。問ひ度も有り淺茅も亦。語りたさに來れ共。人目を忍ぶ粹同志の。フシ顔と顔とに知せあふ。地夫さへ有に大黒舞。面引取れば是はとも。兄の花垣伊織の介。あら懐かしや戀しやと。飛付く程に思へ共。若君の爲比企殿の身の仇とこそ成るべきと。ステテ急來る胸を押鎮め。詞ヤイそこな大黒舞。おぬしは龜相者さうな。當り障りに成ることを必ず云ふな諸ふなど。地詞はさげて心には。戴きまする兄様と。フシ知らせま欲しき風情なり。地四五右衛門氣もつかず。調大黒舞も。何なりと面白う申しませ。地伊織はじつと會釋して。然らば拙者も身の上を。お慰みに申しまじよ。三下り大黒舞大黒くならず者の大黒。大黒と申すは。天竺の人でなし。上京の素浪人。ちやんが一せんあらがねの。槌で打つても金は出ず。乗るべき依持たざれば。米に妹を代なして。それで親子暮した。さつても哀れな大黒。されば果報は知れぬ物。米に賣つた妹が。此國の殿様の奥様になつたげな。詞さらば無心を云はうと。旅立の大黒さつてもむさい大黒。大黒舞を見さいなむさ大黒見さいな。大黒の能には一に妹が見ぬ顔で。二に悪い根性で。三にさあらぬ面をして。四ツよい物蕭張つて。五ついかつい氣色で。六ツむさい下心で。七ツ何がおしうて。八ツ厄介嫌

ひおる。九ツ此方を得向いで。十ヲて吐胸つきをつた。扱も惨い大黒。ナホス地様子知らねば四五右衛門肩身ゆすりて打鎖き。さぞく腹が立申そ。扱々々々妹めは。言語道斷惡い女郎。當分榮花に誇る共何の將來善んべい。そんな不義やつ此方から。勘當をぶち切つて。若い花ぢや立身の思案しがくを仕召されい。近頃侮づりがましいが御合力申すとて。地腰をさぐつて百の錢。フシ轉りと傍へ投やれば。ハツトばかりに押戴き。冥加に餘りし御合力。とてもの事に此錢を。妹が面へ投げたいと。恨みを含む目の内に。餘る。涙ぞ道理なる。地若狹も今は人目にも。餘り難儀の色見えて。四五右衛門に差向ひ。詞其方はようぞ氣が付いた。貰ふ者より妹が。蔭で聞たら嬉しかる。イエいかな事く。悦ぶ事は扱置いて戯けた爺父と笑ひましょ。ハテナうさうは云はぬもの。他人の目にさへ淺ましく。見る影もなき姿形。地妹は身に命にも。代へて苦しう思ふらん。されども若しは國の爲。家の爲又子孫の爲。三ツを一ツにからめたる。切ない義理の有る故に。一人の兄に憂いとも。犬畜生と云はれても。名乗らぬ妹が心かと。他人の我が身に引當て。思ひやるさへ魂も。消ゆるばかりに悲しやと。餘所目は餘所の涙川。フシ沈むはやがて我が身なり。地取亂しては叶はじと。形を作り居直りて。詞よし無き事に暇取つて。神や晩しと待給はん。鳥追ばかりは若君のお伽に屋形へ召連ん。大黒舞は立歸れと。與の戸はたと鎖給へば。地ソレお乗物やりませい。ハツト答て行列の。フシ足もしく過行けば。地伊織の介大晉上げ。詞若狹の局よく聞け。嫌はゞ兄には成るまいが。たつた一言人知れず。問はで叶はぬこと有つて。形を變し様を變へ。漸々巡り遇ひたるぞ。地一夜は館へ連れて行け若狹の局妹と。フシ人目も云はず呼吼れば。地笠原太郎駈展り何とも成らぬ横道者。詞若狹の局の御事は。比企の判官能員とて。お大名の親里あり。何者に頼まれて斯る慮外を吐出す。白狀する迄家来共それ打敵けと罵れば。ヤア龜忽ばし成さるゝな。容こそ微祿致したれ心は花垣伊織の介。棒の先でも當てたらば。八幡堀忍致さぬと。反打ちかけて氣色する。笠原元より武骨者搜浪人の腕ずんばい。たゞき落せと下知せられ。追取巻いて打ちけるは。笑止と云ふも餘り

あり。地若狭の局身を悶き。詞ヤレ麓忽すな早まるや。地廣い世界に同じ名の。有るまい物でなき物を堪へて往せ浪人も。むしを死なせて逃げていね。ヤレ逃げ逃がせと聲を上げ。あせり給へど心なき。雜人原は聞入ず。起れば敵き立てば打ち。落花狼藉花垣と。フシどつと笑うて入りにけり。地無慚やな伊織の介。聲をばかりに泣叫び。エ、胴慾者妹め。此體を見てようもようも。打捨てゝは歸るよな。命の内に此恨み。おのれ晴さで置うかと。すぐく立つて行く袖や。紙子もちぎれ頭巾さへ。行方も知らぬ大黒舞。打出の小槌うつゝなき。身の行く。末こそ三重おぼつかな。フシ玉しげる。地家に住む身は物思ひ。知らで貌さへ形さへ。氣さへ若狭の局とは。名にこそ立れ人知らぬ。下の歎きに消えかへる。雪見の亭に立出でて。淺茅を近く招き寄せ。詞扱々久しや懷しや。ほのかに聞しは和女にも。判官殿の情にて。朝比奈を殿御に持ち侍かるゝと沙汰せしが。地思ひの外のなり形ち。氣遣しやとの給へば。地淺茅は暫し涙ぐみ。問るゝさへも恥かしき。あだに果敢なき身の上を。哀れと思しフシ給へかし。地勤めを致す折からに。重保様と云ひ交す。深き中をばひき裂れ思ひも寄らぬ和田殿へ。嫁入て往たる其晩は恐ろしいやら悲しいやら。現心もなかりしに。調武道を磨く朝比奈殿。事の道理を聞分て。重保様とお出合に變らぬ中の縁結び。御取持に預りしを。父御に劣らぬ堅意氣で。惡逆無道の判官が娘とあれば添れぬと。地願ひもなき御返事故。然らば親子の縁切つて。其上添うて給れと詞をつめて別れしが。調工の多き判官に。逢うて云ふのも氣味悪く。傳を求めて頼まうもお前ならてはなき故に。今日物詣を幸ひに。道に待受け候と。フシ悄々として語りける。扱なう左様な事ぞとは。夢聊かも知らざりし。いとしや苦勞しやつたの。地遠慮がましい今迄になぜ談合はし給はぬ。氣強う思や親と子の。縁が切りたか切らしてやろ。それまでもない自らが。思案一つで添してやろ。詞昔は勤めの兄弟分今改めて眞實の。姉を持たと思つてあや。地嫁入も御所からさせませう。化粧田に卅町。一幡君の伯母上を。重保妻に遣はすと。使を以て云はせたら。秩父殿で御座らうが。否らやと云うて御らうぢやれ。ア、慮外ながらと時にあふ。フシ人の詞ぞ頼もしき。

浅茅はハツト手を合せ。詞そんならお前は姉様か。地此若君は甥御かと。髪を搔撫抱き上げ。今は心も落着いて。お庭のかゝりお物數寄。谷七郷を手の下に見越の塀の馬場先を。引連れ来る大名は何十人と知らねども。色の黒いは朝比奈殿御器量よしは重保様。詞不思議や今朝の大黒舞本田が肩に打かゝり。地此處へ來ますと云ひければ。ハツトばかりに驚きて若狭も立つて見おろせば。地無慚や花垣伊織の介。顔も手足も疵つきて。身に添ふ物も切れぬにて。諸大名に引添うて。オクリ評定所にこそ入りにける。地コハそも何の詮議ぞと。治め兼ねたる胸騒ぎ。ナウ姥もおじや誰も來い今朝の様子は知る通り。大黒舞も浪人とや打ち叩かれたる口惜さに。人を殺めし物ならん。詞賤しき形と云ひながら一幡君へ一度でも。お目見え致せし者なれば。相手はどなたで有うとも。地品によつたら自らが。肩を持つまい物でもない。次の間へ往て聞ておじや。ヤレ行けとせり立て。詞は強く心には。如何なる罪を仕出して。憂目に逢せ給ふぞと。立つて見居て見ろくと。フシ案じ入つたる氣色なり。地腰元二人立歸り。詞大黒舞は何者やら秩父殿を一番に。諸大名衆が舁負して相手は比企の判官様。仔細は未だ知れませぬ。ヤレ取わけて氣遣ひな。また行けと追ひ遣りて胸に手を置き思案して。最早大事に成つて來たしかな事を見ぬうちは。秩父が取持つものでなし。腹立ち紛れに兄様の。如何なる事かの給ひて。我が愛名をや流さんと。フシ忍び涙ぞ道理なる。地乳人の松代遮たゞしく。走り歸りて云ふ様は。詞いや早興の醒めたこと。朝比奈殿へお嫁入の判官様の娘御は。京六條の遊女ぢやと。和田殿からはの給ふを。判官様は眞實の娘と有るの争ひを。秩父殿が中へ出て一ツ二ツの給ふと。判官様が轉りと負け。親でない子でないとの誓言の上にて。朝比奈殿のお内儀が秩父殿へ貰はれて。此一埒はさらりと濟み。跡がお前の詮議ぢやげな。地聞いて參ろと走り行く。浅茅は心いそくと。姉様も早御苦勞に。成さるゝ事は入りませぬ。重保様の女房と私には札が附いたれど。地お前の事が氣遣ひと案じ。顔こそ。優しけれ。地若狭はハツト泣出し。ナウ羨しの浅茅やな。扱浅まし身の身の上や。實に世の中は飛鳥川。變る淵瀬と聞きしかど。二人が中を今の

間に。早く歎きと悦びの。フシ替る物とは知らざりし。地何を隠さん最前の。大黒舞こそ自らが。詞誠の兄にて候ぞや。傾城の身の習ひとて賤しき兄を持つたるが。さして恥にはあらねども判官が娘こそ。君の寵愛淺からず一幡君を儲しとは。日本六十六國には知らぬ者としてよもあらじ。地諸國の大名小名に。若狭の局と侍かれ。榮花を見るは君の恩。元の根ざしは判官の。惡にもあれ善にもあれ。須彌より高き恩ぞかし。地ざりとて誠の親兄を。仇に思ふに無けれども。詞一幡君の一門に。大黒舞と云はれんは。瑕ある玉の如くにて。親子の光りは消失せん。親子の光り失せたらば。判官一家は滅ばされん。逆心募る天罰にて。外の口より知るゝとも。恩をば仇て報すべき。道理は更に無きものを。地今こそつれなく過ぐるとも。若君御代を嗣ぎ給はゞ。心の儘に親兄へ御孝行申さんと。思ふ心の一筋を神ならぬ身は御存じなく。見捨てゝ歸る恨みと云ひ。打ち敵かれたる無念さに。訴人に出てさせ給ふこと。恨みと更に思はれず。詞正直正路な四五右衛門。我が身の上と知らずして。扱々悪い妹めぢや將來が能うあるまいと。地云ひしは胸に應へしが。早く報いの來りしと。思ひ出すさへ淺ましと聲を。上げてぞ泣き給ふ。地淺茅も左右う涙のみ。應答もやらで居る内に。二人の腰元立戻り。胸押撫てて息をつぎ。詞御身の上を唯今が大黒舞と判官殿。角目かなめの受答秩父殿の仰せには。お前が遊女に極らば賤しき腹に若君は。よもや胎らせ給ふまい。取替子でも致したか。負けものかの二ツの内。一幡君も門前より大黒舞の面を着せ。地追ひ拂はんと御評定。若も左様に成つたらば。こちとは何と成るべきと。縄り付いてぞ泣出す。地若狭の局聲を上げ。聞しにも似ぬ重忠が今の詞の愚かやな。天下の鑑と云はるれど。湊石は東夷にて。武道は知れど文は無く。花は有れども實を結ぶ。辨へさへもなかるらん。后高位の御身にて。徒ら有し噂もあり。海士の腹から大臣の。生れ給ひし例もあり。詞傾城遊女の胎内に。大將の子が胎らぬとは。何んの書物で見出し泥の中より生ひ出づる。地蓮より猶美くしき花の顔面白露の。玉よりげなる若君を追失はんと云ふ事は。忠義か扱は逆心か。源氏を守りの御神は。など餘所に見てお在ます。頼家卿の御運さへ。末になつた

か悲^{かな}やと。咽^{ひげ}返り／＼。スエテわつと叫^よばせ給ひける。地^ち涙^{なみだ}の中に若^わ君^{きみ}を膝^{ひざ}元^{もと}近く引^ひ寄^よて。果^{くわ}報^{はう}拙^{ちつ}くまし／＼て。賤^{せん}しき母^{はは}が腹^{はら}よりも。生^なれ給^{たま}ふか淺^あましや稚^{わか}く渡^{わた}り給^{たま}ふとも。只^{ただ}今^{いま}母^{はは}が云^いふ事^{こと}を篤^{あつ}くりと能^よう聞^き給^{たま}へ。詞^{ことば}大^{だい}將^{しょう}の子^こと云^いふものは死^しぬべき時^{とき}に死^しなざれば。人^{ひと}の笑^{わら}ひを受^うくるぞや。母^{はは}が詞^{ことば}を懸^かけたらば此^こ守^しり刀^{やいば}にて。咽^{ひげ}の邊^{へり}に突^つ貫^{くわん}ぬき。頼^{たの}家^け卿^{けい}の胤^{ひな}と有^ある。證^しを見^みせて母^{はは}が身^みの。恥^ち辱^{じよく}を雪^ゆぎ給^{たま}はれと。地^ち云^い含^くめれば一^{いっ}幡^{ぱん}君^{きみ}わろびれ給^{たま}ふ氣^き色^{しき}なく。腹^{はら}十^{じゅう}文字^{もんじ}に切^きらうかと。堯^{ぎょう}爾^にと笑^{わら}める稚^{わか}顔^{がほ}。見^みるに目^めもくれ心^{こころ}消^{しょう}え。抱^{いだ}き付^ついてぞ歎^{なげ}かる。地^ち淺^{せん}茅^{ちやう}茹^{じよ}と押^お止^{とど}め。ア道^{みち}理^りやさりながら。詞^{ことば}二^に度^どの便^{べん}りに跡^{あと}先^{せん}の詞^{ことば}の違^{ちが}ふ所^{ところ}あり。傾^{かた}城^{じやう}の名^なも假^{かり}親^{しん}も。變^{かは}らぬ姉^{あね}と妹^{いもうと}を。我^{われ}は秩^{しつ}父^ふの嫁^{よめ}にしてお前^{まへ}を若^わ君^{きみ}諸^{しよ}共^{ども}に。追^おひ失^しはん様^{やう}はなし。地^ち浮^うくも沈^{しづ}むも同^{どう}じ世^よに今^{いま}より誠^{まこと}の兄^{あに}弟^{てい}ぞ。甥^{せう}御^ごと契^{ちぎ}り初^{はじ}めたる詞^{ことば}はいかて違^{ちが}ふべき。篤^{あつ}と様^{やう}子^こを聞^き届^{とど}け。死^しなでかなはぬ道^{みち}ならば。跡^{あと}にはなご残^{のこ}るべき三^{さん}ツ瀬^せの川^{がは}を諸^{しよ}共^{ども}に。手^てを引^ひいてこそ渡^{わた}らめと。フシ諷^{ふう}め合^あふこそ優^{やさ}しけれ。地^ち若^わ狹^{せう}の局^{きよく}顔^{がほ}を上げ。なう嬉^{うれ}しの人^{ひと}の詞^{ことば}や。七^{しち}度^ど結^{むす}びて姉^{あね}と成^なり。六^{ろく}度^ど契^{ちぎ}りて妹^{いもうと}と成^なる。それは誠^{まこと}の兄^{あに}弟^{てい}よ是^{こゝ}は今^{いま}日^ひしも假^{かり}初^{はじ}に。云^いひ交^かしたる契^{ちぎ}りと一^{いっ}所^{ところ}と迄^{いた}にの給^{たま}ふは。先^{さき}の世^よよりの約^{やく}束^{そく}と思^{おも}ひ遣^{はな}るさへ睦^{もく}まじき。眞^{まこと}實^{じつ}覺^{かく}悟^ご極^{ごく}めてか。詞^{ことば}ア、愚^{おろ}かなる仰^{おほ}せやな。武^ぶ士^しの性^{しやう}根^{こん}は時^{とき}に依^より味^{あじ}方^{はう}が敵^{てき}に裏^う返^{かへ}る。例^{たと}はあれど傾^{かた}城^{じやう}の云^いひ交^かしたる心^{こころ}底^{そこ}は。地^ち違^{ちが}へぬと云^いふ手^て本^{ほん}は末^{すえ}世^よの人^{ひと}に見^みせうもの。急^{いそ}せ給^{たま}ふな姉^{あね}様^{やう}怯^{おそ}れを見^みせな妹^{いもうと}と。互^{たがひ}に顔^{がほ}を見^み合^あせて。堯^{ぎょう}爾^にと笑^{わら}うつ泣^なきもしつ。フシ死^しを待^{まち}つ内^{うち}ぞせつなけれ。地^ち斯^{しか}る所^{ところ}へばたばたと。乳^{ちち}人^{にん}腰^{こし}元^{もと}駈^か戻^{もど}り。詞^{ことば}なうお悦^{えつ}び成^なされませ。判^{はん}官^{くわん}殿^{だん}利^り潤^{じゆん}に成^なり。大^{だい}黒^{くろ}舞^まは舞^ま舞^ま。由^{よし}井^いが濱^{はま}にて御^ご刑^{けい}罰^{ばつ}。地^ち仰^{おほ}せ付^つられ候^{こう}と。きほひ懸^かれば兄^{あに}弟^{てい}は。命^{いのち}を延^のる悦^{えつ}びの。中^{なかつ}に歎^{なげ}を引^ひ出す。伊^い織^{いぢ}の介^{けい}が縛^{ばく}めを。本^{ほん}田^{でん}の次^じ郎^{らう}繼^{けい}取^とにて。屠^と所^{じよ}の羊^{やう}の引^ひ綱^{きやう}や。隙^{ひま}行^ゆく駒^{こま}の足^{あし}元^{もと}も。よろり／＼と行^ゆく道^{みち}を。若^わ狹^{せう}はわつと泣^な倒^{たお}れ。又^{また}起^た上^ありあれ／＼。あれなう兄^{あに}様^{やう}／＼と。聲^{こゑ}からしたる呼^よ子^し鳥^と。うき川^{がは}竹^{たけ}につらなれる。枝^{えだ}を放^{はな}れし鷺^{さぎ}や。子^こは子^こなりけり時^{とき}鳥^と。悦^{えつ}びの浦^{うら}敷^{しき}の浦^{うら}。恨^{うら}を誰^{たれ}に由^{よし}井^いが濱^{はま}。波^{なみ}なき方^{かた}に立^た波^{なみ}の。袖^{そで}の浦^{うら}とは兄^{あに}弟^{てい}が身^みの上^{うへ}。にこそ知^しられけれ

第 四 若狭の局道行

フシ嬉しとは。昔ぞ詠みし星月夜。明くる詫しき鎌倉の御所の御門の七重八重。越えつ忍びつ隠ろひつ。若狭の局妹は浅茅と云へど浅からぬ。思ひは一ツ二人連。フシオクリ現つて心もフシ亂れまし。一幡君が今も猶。母に添寝の夢や見ん。スエテ寢顔脇顔笑ひ顔。目にちらつきて身をさらぬ。袖と袂のうらくに。ギンオクリ涕碎けて音無ししの瀧の。白絲糸による。フシ物ならなくに別路の。心細くも夜の道。地迷ひ来る身がやつ過ぎて春まだ寒し雪の下。ハツミ積る思ひにフシ愛別離苦の。理りしるき曙や。地東光山の鐘の聲。別れを歎く人有れば眠りを。覺す法の友。親同胞は遠近に。堇莢も名のみして。ヒロヒ霜の。芝道踏みしだく。紅匂ふ空煙に。誰待つ宵の侍従川。オクリ寄せては返る白波のふじが。谷とはあれやらん。一刷毛。さつと横雲は。誰筆。フシ染めて隈取りて。四季の詠めもことはに。代々を重ねし鶴が岡。三下り歌こゝはやれ。何處ぞと道人に問へば。此處はさ。坂川辻町ぢやとさ。ナホスフシ心ばかりは由井が濱。フシつらなる枝を。打波の胸に徹へて身に懸る。實て空しき骸にだに。行合川の丸木橋踏みは。返さじ一筋に千代の。例しの細石無き名の數や數ふらん。無常を告ぐる野鳥の。スエテ聲も。鋭どき松蔭に暫らく。休らひ給ひけるフシ梟は寢に行。鳩は起きて出づるとかや。明けなんとして玉鈴の道まだ闇らき岸かげに。高札立てて高提燈さし寄りて見給へば。詞何々若狭の局が兄。花垣伊織と云ふ者上を偽り掠めし故。刑罰に行ふと。地讀も終らずこゝそこと。見渡す向ふに獄門の顔は知らねどそれとのみ。するく走り寄り。なう淺まししの御姿や。人をも殺め盜みをし。重き科有るものこそは斯る憂目に逢ふと聞け。ありの儘なる有る事を。云ひも聞かでやみくんと。非道の掟に逢ひ給ふ。是と云ふのも自らが。名乗て出てぬ誤りを。百千萬の云譯も。今では甲斐も落漕ぐ。蜚の小舟のこがれ來てせめて最期の御顔を。拜まんとこそ思ひしに。早くも變る兄上の。御面影とばかりにて。二人は其所に倒れ伏し。泣くよ

り。外の事ぞなき。地本田の次郎近常夫とは知れど知らぬ顔。詞ヤイ／＼女寄るまいぞ。言語に餘る大罪人首なと盗み取れんかと。本田が番を相勤む早や／＼返れと云ひければ。地二人は頓て起直り。詞ハ秩父が家來の本田よな。我こそ若狭の局なり。是なるは又淺茅とて汝が主人重保が。様子は知つてゐる女。就ては彼なる高札に心得難き事こそあれ。詮議が闇い狼狽た秩父に是へ參れと云へ。尋ねんとの給へば。近常ハツト畏り。驚き入たる仕合かな。扱又詮議の筋に付き何か御不審候よし。重忠召すにも及ばぬ事憚りながら拙者めが。申開き候はん御尋ねあれと領承す。ム、何といふ其方が主人に代つて返答とや。只今尋ぬる色品を。若し云譯に詰りたら。地まああの如く汝が首獄門の木に曝すぞよ。心を鎮め能つく聞け。詞あの高札に若狭の局が兄伊織の介と書付しは。確かな證據あるならん。然る上には彼の者を上を偽り掠めしとて。なぜ刑罰には行うたぞ。地但し偽り者ならば。若狭の兄とはなぜ書いたぞ。二ツに一ツは重忠が。誤りにては有るまいか。フシ返答聞かんと給へば。近常莞爾と打笑ひ。云うても女儀の事なればそこ等は御存じ知られぬ事。國の政道致すには非理法權の四ツの文字第一に仕る。理非の捌きは常の事。理は持ちながら一國の。法を背けば落度となる。理も有り法も背かねど。權威には又壓るゝなり。權威と云うては誰あらん比企の判官能員殿。理非善惡も顧みず。地法も無法も辨まへねど。君に出頭無二と云ひ若狭の局の親御ぢやの。一幡君の祖父様のと。もちのぼしたる權威をば。碎く時節の來らぬ故。糟をくらつて泥水の。澄るをじつと待つてゐる。重忠は溫和の武士。花垣伊織お局の兄と見すゑて有りながら。詞首を打しは政道に。權の一字を用ゆるなり。又高札の書付は。近常自分の了簡にて。學問したる事もなく智慧に餘計も候はず。善なれば善惡は惡。見えた所をまつ直に云はねば聞かぬ生れ付。地御名を出したが落度なら獄門の儀は扱置いて。火刑にも遊ばせと道理をならべ云ひ立つれば。地二人は兎かうの詞なく。ステテ差俯。むいておはします。詞近常居丈高になり。拙者めも亦御局へ御不審の申すべし。兄を敬ふ禮儀をば御存じあらば昨日にも。名乗つて御出て成さるゝ筈。イヤ／＼身こそ大事ぢやと御引きな

さるゝ心底なら。只今是へは無用な事。生ける時には無禮をし。物をも云はぬ死首に。地くどくとした云譯は心得難しと冷笑へば。地淺茅はやがて差出て。詞ヲ、能い御不審さりながら。遊女は義理の商賣にて身を庇ふなど云ふ事は。かけても知らぬ事なれど。大將軍の奥様の昔のしがを云はるゝは。夫の恥辱子の恥辱。地判官殿の恥辱にて名乗り合ぬは伊織殿。只一人の恥辱ぞと最かるゝしき了簡が。地思ひの外に兄上の。身を滅ぼせし悔しさの云譯もしつ御首を。烟になして亡き跡を。弔ひ給はん其爲に御所を諸共出たれば。詞再び歸る心でなし高札を打割つて。首をこなたへ渡されよ。地但しは了簡成るまいかと守り刀を取出し。妹が抜けば姉も抜き。どうぢやく」と詰寄るは。フシ何れせつなき心なり。地近常ハツト感涙し何しに惜み申すべき。首は勿論驅共。只今進上致さんと。襤を明くれば伊織の介は走り出て。ヤレ妹よ兄様か。是はく」とばかりにてフシ呆れる。も亦涙なり。伊織涙を押拭ひ。昨日の恨み引かへて。今日の心底満足せり。詞某當地へ来る事御身に逢うて身の榮花。極めん爲にて更になし。去年三月五日の夜羽黒山の修驗者。豪海と云ふ法師に一夜の宿を貸しけるが。親玄蕃が寢首を掻き夜の内に逃失せしを。地此處やかしこと草を分け縁を求めて尋ねれども。知れぬこそ道理なれ頼家卿の歸依僧にて。營中を離れぬよし狙ひ寄るに手術なく。そなたを語らひ討ん爲遙々此處に下りしと。始終を語れば若狭の前こはそも夢か淺ましや。假令暫しは別るゝとも待つとし聞かばいづぞは又。鎌倉へ呼び取つて。朝夕御顔を拜まんと。仇の頼みもなき身ぞと。咽入りくフシ敷かるゝ。地漸う涙を押止め。能くこそ思ひ立給ふ親の敵と云ふからに。討たて叶はぬ道なれば心を盡し氣を碎き。狙ひ了て討給へ。兄様頼むと云様に。守り刀をずいと抜き心元を刺通せば。こはそも如何にと人々は。フシ驚き騒ぐばかりなり。地伊織は膝に搔抱き。詞心得難き有様や。兄弟名乗り逢ひたるが一分立たぬと云ふ事か。地様子を語れと云ひければ。地若狭は苦しき聲を上げ。ア、愚かな事をの給ふかな。廻り逢うたる嬉しさは。冥途の道の土産ぞや。宿世いか成る報にやうさも辛さも悲しさも。身に積む罪のあちきなや。聞けば聞く程自からは。世に存へん

様はなし。判官殿の常々に。舅若狭の誠の親兄弟生きて此世にある内は。いつか名乗出づべきと心の休まることなしと。戯れ事にの給ひしが。其蒙海と云ふ法師。分けて懇志の中なれば。それを頼みて父様を殺し給ふに紛れなし。討たれし親も自ら故。討たする親も自ら故。今又祖ふは誠の兄。地手引をせぬは不孝なり。心を合せは是迄の。榮花の恩に預りし後の親をば親とする。義理に背くが悲しさに。斯くこそ思ひフシ定めしぞや。體は朽ちて行くとても。我が魂は妹の淺茅が胸に残し置く。詞兄弟心を合されて。敵を討つて父上や又自らが修羅道の。苦患を早う救うてたべ。本田殿へは取分けて。地申置き度き事こそあれ。一幡君の行末を。宜に見立て給はれと。重忠殿へ頼うてたべ。是のみ黄泉の障りぞと。口説言こそ哀れなり。近常涙拭ひ。詞お心安く思召せ伊織殿の御事も。敵を首尾よう討たせん爲成敗せしと偽りて。大罪人の首を討ち獄門の木に曝しも。是皆主人の計略なり一幡君を御代に立て。地重忠後見致す事。何しに違背申さんと。世に頼もしく答へれば若狭の局手を合せ。ア、有難や忝や。此上思ひ置く事なし。兄様さらばと云ふ聲の。よわると聞けば玉の緒も。フシ切れて果敢なく成りにけり。淺茅も共に泣狂ふを近常伊織押止どめ。詞師の魂止りて親の敵を討つ迄はこなたの骸は預り物麁相成れな怪我有るなど。地諫め謙してたつか弓彌猛心はさる事にて。云うても敵は本身者。主人などが知恵も借り力も借つて討給へ。若狭の局の御最期は。沙汰なし／＼御死骸を。密かに寺へ送らんと。先づ長持に昇入れて。本田は先肩跡は兄。逢はぬ昔しの戀しさと。逢うての今の悲しさと。擔ひくらぶる棒先の。永き別れぞ。三重是非なけれ

まよひの姿繪

露フシ牛羊徑街に歸り鳥雀枝の深きに集る。實に世の中は仇波の。寄邊はいづく雲水の。身の果いかに知らざりし。地御悼はしや頼家卿。瓊樓玉樹の闇の内。二世の三世の七世のと。互に契り交されし若狭の局何となく。館を紛れ出

給ひ。今に御行方知れざれば。現心も涙の床身を知る雨の明暮に。翼しほるゝ雛鶴の。地一幡君も朝夕に。母よ／＼の諸聲に。いとと歎きを増鏡。佛うつす姿繪も。それも心に任せねば。責めては夢を頼むてふ假の枕の假御殿。一念既に亂るれば。迷ひの門を開くとは。知らぬ御身ぞ味氣なき。鑑石に勢あり水に音あり。風は大虚にわたる。形を今ぞ現す女。懸軸を離れて心魂忽ち。顯はれ出たり不思議な。二人フシ水莖の。筆の禿と身を染めて。眠り習ひの夕邊より。幾朝ごみの春秋を。梅は柳に靡びき合ひ。松は櫻の合ひ床も。昔語りにフシ成たるぞや。フシ奥様なりの。釣夜着に。鴛鴦の衾の羽根かはし。情かはすも色の淵瀬と。水のかしはの浮沈む身は浮草の根を絶えて。娑婆に残れる輪廻の業火は雲霧の。軒端に立つて雨に霑に。△霜に雲に積り積つて消え返りては。又降る雪の姿の富士よ。烟比べば浅ましや。なう懐かしや一幡君。親子の中は一世とは。江戸誰か云ひけん空言や。泣く音は遠き吾の下露の。そこなる。魂に。答へて餘り悲しさに。姿をかりの懸物に。映て是まで來れりと。障子の内の床しげに。フシすつくと立つておはします。ナホス地頼家見るより走り出て。恨めしの若狭やな。妹背の山の中を行く。吉野の川のよしや世に。何がつらうて悲しうて。スエテ屋敷は遁れ出けるぞ。○ア、愚かなり／＼。誰に恨みを由井が濱。親同胞になのりその。フシ名乗れとてしも假初に。忍び出てたる。閨の戸の。跡だに未だ鎖ざりしを。誰が通ひ路と今ははや。棲や重ねし小夜衣。妬ましの男やな。△地いやらしの妬みやと逃んとすれば。○引戻し。△拜めど○顔を打振つて格氣は女の手癖口癖往古今も。貞女宮女も。定家墓や葛原墓。はひ纏はれても。△此身元より植木にあらねば。臺に輝く鏡もなし。二人煩惱菩提は。法の道通フシあら面白の世の中や。○相ノ山夕べ朝の。鐘の聲寂滅爲樂と響けども聞いて驚く人もなし。花は根に鳥は古巢に歸れども行きて。歸らぬナホスフシ死出の道。○詞申殿様。△なんぞ。○酒をばふつゝり止めさんせ。△なぜに。○色遊をも置かしやんせ。△そりや成らぬ。○地すりやどう云うても止めぬ氣か。△おゝいかなこと／＼。○そんなら妾は最う往ぬる。△どこへ。○あの世へ。△詞あの世とは。○はあて冥途へ往にまする。△地頼

家はつと氣を注て。何と冥途へ歸るとは扱は此世を去りしよな。○地藻に住む虫の我からと。双の上に消えし身の此世に心は止めねど。迷ひ來るは君故ぞや直きを捨て曲るに。親み給ふ誤りも。色と酒との二つとぞ。諫め申さん爲ばかり。フシ再び見え候なり。江戸地唐土玄宗皇帝は。御心賢くて。治まる御代は五十年。國土も民も太平の。天子と呼れ給ひしが。海棠眠る楊貴妃の。ナホス本フシ桃の姫ある顔ばせを。御目尻に懸りしより。逆臣起つて御事も。キンオクリ帝都の外に出て給へば。比翼連理と契りたる。フシ羅綾の袖もあだし野の。露かあらぬか魂の在所を。尋ね詫びさせ。フシ給ふとかや。憂きことをくらぶの山の鶯の。子に迷ふのも恩愛の。長地薄き契りの袂には涙を包む春雨に苔める花の若君を。最一度見たし抱きたしと。フシ障子の評に立寄れば。地コハ何んとせん情けなや此世あの世と立隔つ。二人コハリ罪障の雲高くして涙の霧や戀慕の霞を朦々として。ナホス○地見れども見えず聲も聞えず。南無三寶。親子は一世の契り知られて。泣いて笑うて悶え焦れて。かつはとフシ伏してぞ泣き居たる。△地頼家類に大音上げ。地李夫人去て漢王の空しき床の寫し縮に。魂迎せし烟のうち云はず笑はぬ佛を。歎きしも身の上なるを。現世の逢瀬叶はずば。双に死して此世を去り。極樂諸天は愚かの事。假令地獄の底迄も。誘へ連立て伴へと手に手を取て。フシ○行くも歸へるも。逢坂の關も此身は止め得ぬ。泣くも笑ふも夢も現も幻も。最早別れのあら堪難や。地双の罪に修羅の太鼓のさらばと云へば。△暫しと止むる。○袖振り放せば。△目にこそ見えね二人コハリ踏足元は猛火の煙りこは浅ましやと。逃げつ。轉べどまた行く先も火焰の煙に姿も焦れ。○ナホス身慄してこそ。フシ立たりけり。地惡かれと思はぬ山の峯にだに。あふなるものを人の歎きは君を侮り。民を惱す判官父子が悪心惡逆。縁にひかるゝ我が身に報うて。二人廻り車のくるりくるく。くる夜もく明けてもく千年萬年。コハリ百千億劫卒惡鬼の咎に打れ。山に上れば劍に劈き。谷へ下れば。地紅蓮のこほりに。白無垢却つて唐紅の花も。紅葉も月も。フシ雪も。人間萬事は胡蝶の戯れ。酒は仇をば結ぶの双。色は命を。ナホス○地切るの錢。地皆とり捨て今日より政道正し給へと。

聲華やかに夕告鳥のフシ形は其儘消えてんげり。△地頼家泣く／＼慕ひ惑うて。座敷の隈々此處よ。其處よと尋ね廻れば。○又立歸る閨浮の有様向ふに翻然と形を顯はす。△地抱き留んと走り懸れば。其儘消えて雷光石火の水の螢の地ぢら／＼。ちらり／＼と立廻る。面影月影諸共に。あくる詫しと云ふかと思へば。形は其儘元の掛軸に。立戻り。フシ畫空事とぞ成んにけり。△地頼家はつと手を打つて。迷悟三界唯一心。昨日の酒の酔醒て。今日は衣の玉を得つ。家には子あり弟あり。國の警衛は和田秩父。搖ぎなき世の鎌倉山。我が身は思ひきりが谷。唯今幽靈生存へ。手向の花と髻を。切つて彼處へ投げ給ふ。順縁あり逆縁あり。共に成佛得脱の道の道とは。往古の聖人も。説き置き給ひける

第五

地天道は満るを缺き地道は驕奢を憎むとかや。奴も判官能員は若狭の局自害故。地積惡世上に露顯の上先つ頃より頼家卿。御不例甚だ重うして事極り見えければ。謀計日夜身に迫り野心の胸に手を置いて。フシ御次に控へ居る處へ。地願行院豪海は御祈禱の爲宿直して。御枕元に居たりしが。徐り／＼と忍び出て。判官を見るよりも。詞ヤア比企殿か。法印か。先づ／＼君の御容態如何渡らせ給ふぞや。然れば次第に日を追つて元氣弱らせ給ふと見え。正體も無き御風情。コレ大切の場に成りしぞや。今にも尼君北條など御居間に詰めかけ。御家督の沙汰あらば。地貴公の仇とならん事。鏡にかけて見えた事。此頃心を盡されし。用意如何と囁けば。判官莞爾と打笑ひ。御坊氣遣なさるゝな。そこらはぬからぬ存込だ。言るゝ通り毛虫めら。病ほうけの頼家に。差込れては年來の大望が成就せぬ。所詮本復ない命一思ひに刺殺し。御家督は一幡へ御相續の遺言と。鎌倉中へ披露せば。地差詰め拙者は執權役。粹どもは自から。外戚の威を振ふべし。貴僧へも又千石か。二千石は知れた事。詞其上にも和田秩父。北條などが意地ばらば。片端から欺し討ち。コレ床の下を掘抜いて。忍びの者を入れ置いた。地悦び給へと云ひければ。豪海ぞく／＼小踊し。ハテ

御殊勝な御了簡。萬事は頼み上げますと。フシ領き合うて居たりける。地頼家卿それぞとは夢にも知らず御寢間より徐々と歩み出て。詞兩人に打向ひ。地今日は「入氣も勝れず。宿直の者がつくぐ」と取廻すのも鬱々しい。暫く爰で語らうと。フシ打解け給ふぞ危ふけれ。二人は悦び目配し。左手右手より飛かゝり。刀を胸に押當て。詞コレうつそり殿。どふて快氣のない命。生けて置いては某が。大望の妨げ覺悟なされと突掛る。頼家ハツトばかりにて。差俯伏て在せしが。稍有つて宜ふは。詞人窮する時は偽り。鳥窮する時は搦む。窮鼠却つて猫を喰ふとは汝らが事なるよな。地エ、過つた重忠や。義盛數度の諫言を思ひ出づるも恥かしや。覺悟極し上からは命は更に惜からず。爰を放せ腹切ると二人を左右へ突倒し。既に斯よと見えける時。怪しや御座の疊の下。ぐわらりぐはたぐと。百千萬の地雷大地も崩るゝ如くにて。頼家卿のおはします御座の疊の下よりも。ずつと差上げ朝比奈が踏んばたかつて立つたるは。堅牢地神の湧出かと。フシ恐れ慄くばかりなり。地判官漸う氣を静め。詞ヤア後れたかかねぐに。牒し合せし悴共。笠原中野は何所に有る。地出あへぐと呼はれば。詞朝比奈からぐと打笑ひ。甲に似て穴を掘る鼯鼠のへろへろ武士。地御用ならば進上と。ばらりぐと人牒。投げ出しぐと投げ出し。大太刀寛げずと寄り。詞コレヤそこな護摩の灰。身が法力の鐵縛三寸繩の珠數繫ぎ。ナント弟子にならぬかと。地二人が細首引摘み。ゑいやぐと絞付れば。眼を見出し血を吐て眞平御赦免ぐと。フシ手を合するぞ心地よし。地斯る所へ和田秩父本田垣匠來り出來したぐ朝比奈と煽ぎ立れば。義秀は。詞コレ伊織殿。此法師めは其許で。御慰みに料理あれ。地判官は某が只今庖丁致すぞと。首宙に打落す。伊織もすかさず豪海を水も堪らず打放す。ヲ、潔よし面白し。惡人退治國繁昌。佛法繁昌武家繁昌。五穀成就願成就。佛力神力の整ふ國こそ目出度けれ